

## 審査の結果の要旨

氏名 廣瀬 英子

コンピュータの昨今の急激な発達と普及は、テストについてもその形式、実施形態、利用法、用途等々さまざまな側面に渡って大きな影響を及ぼしつつあるが、なかでもコンピュータのもつ即時性と双方向性は予期以上の大きなインパクトをもたらす可能性がある。

本論文は、このコンピュータのもつ即時性と双方向性というものを積極的に活用し、被験者に再度応答を求めることによって従来の紙筆テストの枠を超えた2つの実際的な技術を、質問紙法による性格検査で代表されるような客観式典型反応測定型テストと多肢選択法による能力テストで代表されるような客観式最高値測定型テストとの2つの客観テスト領域において提案するものである。

まず、前者の典型反応測定型テストにおいては、被験者の反応に整合的でないものを発見した場合に、その被験者に再度解答を要請することによって反応の再確認を図ろうとすることを考える。性格検査等では、しばしば不注意や質問文の読み違い等が発生していることが疑われるが、本論文ではそれをモデルから推定された被験者の特性値等から見て尤もらしくない項目反応を見出すことによって、応答を再確認できる技術が提案されている。従来より、典型反応測定型テストにおける不整合反応パターンを検出するための議論は活発になされていたが、本論文で提案された指標は不整合反応がテストの中のどの特定の項目で発生しているかを検出するもので、その点において独創性が認められる。

後者の最高値測定型テストにおいては、ある問題項目に対する解答として選ばれた選択肢が誤答であった場合に、そのことを被験者に知らせ、新たに別の選択肢を選ばせることによって、被験者の能力に関する情報をより正確に収集すると同時に、被験者の理解や知識を誤ったままにしておくのではなく、正解に至るまで考えさせるというフィードバック効果をもたらすであろう技術が本論文では提案されている。解答が誤っている場合に、そのことを被験者に知らせ再度挑戦させるという方法は「達成式解答法」と呼ばれすでにある程度の研究成果は蓄積されてはきたが、即時的に正誤情報をフィードバックするという点における技術的困難が未解決であったため議論の進展が阻害されていた。しかし、コンピュータの発達普及によりこの方面における研究の急激な進展が期待されている現在、本論文で提案された新たなモデルと技術は十分にその教育学的意義をもつものと思われる。

本論文は以上2つの新たな提案とその提案の妥当性をシュミレーションによって吟味した結果を含んでおり、今後の教育測定や教育評価の発展に寄与するものと考えられる。よって本論文は博士論文の水準を満たすものと認められた。